

第二洞天委羽山洞探訪記

大形 徹



写真1 バイクにのる人の後方にみえる小さな山が委羽山

委羽山は道教の十大洞天の第二洞天である。土屋昌明・鈴木健郎・大形徹・通訳の裘君（北京大学大学院 道教専攻）の四名で、2009年9月9日に調査をおこなった。十大洞天は司馬承禎『天地宮府図』および杜光庭『洞天福地岳瀆名山記』にみえる¹。

『雲笈七籤』（宋、張君房）巻二十七に唐、司馬承禎（647～735）『天地宮府図』が引用されている。その十大洞天の第二洞として、

第二洞天委羽山洞、周廻萬里、號曰、大有空明之天、在台州黄巖縣、去縣三十里、青童君治之

とみえる。

十大洞天は杜光庭の『洞天福地岳瀆名山記』にもみえ、内容が微妙に異なるのだが、ここでは、その問題には深く立ち入らない。十大洞天には、未だ在りし所を詳らかにせずという第三西城山洞、恐らくは人跡の及ぶ所に非ざれば、其の所在を知る莫しという第四西玄山洞²のように、その場所が確定できないものもある。

ところがこの委羽山洞は台州黄岩区羽山の市街地に現存する。現地で買い求めた一枚ものの台州の地図には、▲つまり山のマークがつけられており、山と認識されている。ただし、委羽山ではなく、羽山と記されている。グーグル・マップの地形図で確認すると、20メートル刻みの等高線が二本しか引かれていない。40メートルから60メートルの間の拍子抜けするほど低い山である。

1 文献的な考察は拙稿「洞天における山と洞穴—委羽山を例として—」を参照。

2 前掲『天地宮府図』



写真2 地図 海に近い場所である

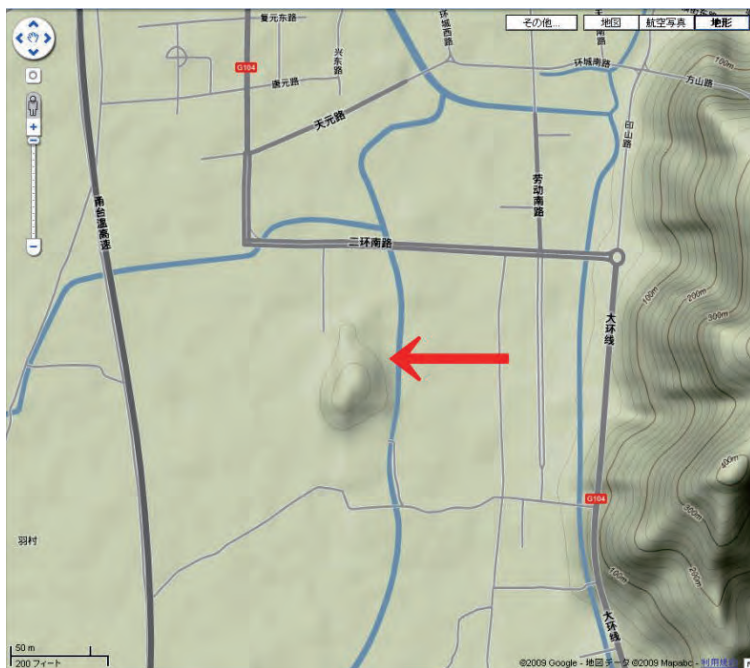


写真3 拡大図 矢印の小さな山

十大洞天のことを記す古い文献には、委羽山の山の高さに言及したものはないが、比較的新しい文献である『委羽山志』序に以下のようにみえる。

越中の名山、天台・雁岩・括蒼・會稽・山陰の如きは、未だ僕の数え易え更めず。委羽

は諸山の中に在りて、大なること撮を躡えずして、天下の洞天の二に居る、所謂、山は高きに在らず、仙有れば則ち名あり、と。其の往時を跡づくるに軒轅、書を藏し³、奉林、雀に控せられ⁴、季主、鯉を釣り⁵、范錡、鏞を賜る⁶、其の較や著わるる者なり。又た洞の異を傳うるに、霓裳の仙姊、杉檜松竹の間に逍遙す。洞前に琪樹有り、吾れの如きは瓊花を揚げ、洞に入るも、深宵として測り⁷巨く、行くこと數日にして竟らず⁸。方井煮る可し。丹井、瑞井⁹の泉、疾を療す可し。…



写真4 委羽山志

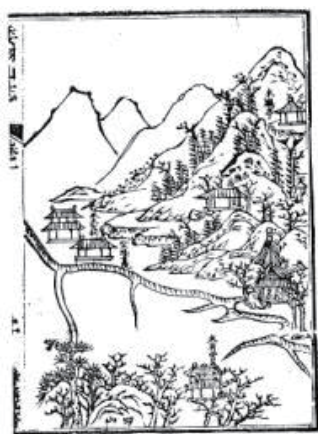


写真5 委羽山志 地図

「山不在高、有仙則名」は、劉禹錫の「陋室銘」である。この山のために作られた詩ではないが、この山の形容として使用されている。

タクシーの窓から小山が見えた。委羽山新区の看板があり、バイクで通行中の人の後ろに写っているものがそうである（写真1）。道観の入り口の牌坊（写真6）まで乗り付けた。牌坊は石造りで下部に雲気文のついた石鼓をもつ。堂々たる文字で「第二洞天」と刻まれている。しかし、牌坊のすぐ前には、道を隔てて、シャッターを閉じた工場が迫っている。プラスチックの容器をつくっているとのこと。牌坊から道観に至るまでは、民家と畑とゴミ捨て場である。

前方に道観が見えてきた。左右が三階建てで真ん中が二階建てである。この建物はそれほど古くはない。瓦は赤茶色で屋根の中心にはヒョウタン形の瓦が立てられている。邪気を吸い取る

3 軒轅は黄帝。

4 奉林は劉奉林。劉奉林については、前掲「洞天における山と洞穴——委羽山を例として」の劉奉林を参照。「委羽山大有宮簡介」に鶴に乗ることがみえるが、古い文献では、劉奉林が鶴に乗る話は出てこない。

5 季主は、司馬季主。季主が鯉を釣る話も古い文献には出てこない。

6 范錡は「委羽山大有宮簡介」に宋の徽宗との関係が説かれる。鏞は釣鐘。

7 道観の中に現存する。

8 道観の中に現存する。

9 越中名山如天台・雁岩・括蒼・會稽・山陰、未易更僕數。委羽在諸山中、大不踰撮而居天下洞天之二、所謂山不在高、有仙則名矣。跡其往時、軒轅藏書、奉林控雀、季主釣鯉、范錡賜鏞、其較著者也。又傳洞之異、霓裳仙姊、逍遙杉檜松竹間、洞前有琪樹、如吾揚之瓊花入洞深、宵叵測。行數日不竟。方井可煮。丹井瑞井泉可療疾。…



写真6 第二洞天の牌坊



写真7 大有空宮 右奥の山が委羽山、その上に騎鶴宮

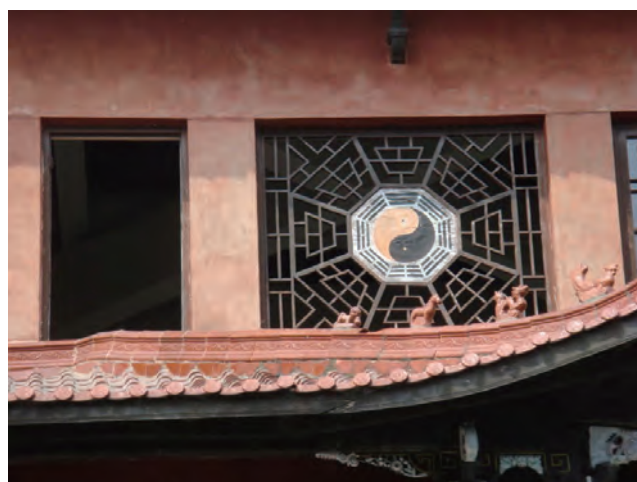


写真8 陰陽と八卦と鬼龍子

辟邪の飾りであろう。下方に伸びる屋梁には鬼龍子が並んでいる。道観の壁も同様の色に塗られている。窓には木製の格子がつけられ、その中心には陰陽と八卦を組み合わせたマークが嵌め込まれている（写真8）。屋根をささえる部分には、杖をもち、葫蘆をかかげる八仙の李鉄拐（写真9）などの神像や龍、雲気文等の彫刻が施されている。



写真9 八仙の李鉄拐など

建物には「委羽山大有空宮（写真10）」の扁額が掲げられ、落款に玉浄道人書とみえる。信人弟子 林荷法 林晨曦 義助とあり、信者の寄進であることがわかる。対聯には、向かって右に「道成跨鶴去仙源福地尚留羽（道成り鶴に跨り去り、仙源福地尚お羽を留どむ）」、左に「琳宮稱大有空明洞天繼去宗（琳宮、大有空明洞天と稱し、繼いで宗を去る）」とみえる。羽根を留めるという話は騎鶴宮のおばあさんにも伺った。羽山あるいは委羽山という名の由来と関連があるだろう。



写真10 扁額

建物の横から奥に進むと赤色の塀に右から福生無量天尊の文字が一文字ずつ黄色の円の中に大書されていた。さきほどの建物の裏側には壁がなく、神像が飾られる。金色に塗られた座像で、

黒い鬚を生やし、右手には剣をもつ。前に位牌が一つおかれ、「三元三品三官…と玄天上帝…」の名が並べて記されている。この神像の裏側にも金色の立像の神像がある。



写真 11 龍虎



写真 12 柏、樹齢 150 年

右に進むと古い道観の門がみえる。両脇の壁にはそれぞれ墨で龍、虎と記されている（写真 11）。文字は高さが一メートル五十センチばかりもあるが、下の方は擦れて見えなくなっている。真ん中には「大有宮」の扁額（写真 11）があり、「民国二十一年」の紀年がみえる。傍らには一本の柏があり、樹齢 150 年（2002 年）（浙江省古樹名木保護牌）と書かれている。



写真 13 委羽僊踪 九天應元府

門を入ると中庭があり、「黄岩県文物保護単位 委羽山大有宮 黄岩県人民政府 一九八二年」という石碑がある。向かい側の建物に「委羽僊踪」と書かれ、真ん中の上部には、「九天應元府」と書かれている（写真 13）。両脇にはそれぞれ内側を向いた水を吐く龍が描かれている。屋根には、桃の形をした瓦がおかれている。これもまた辟邪であろう。

道観の内部には三体の神格が安置されている。いずれも立像である。中央の神は大きく、額に縦の目がついている。向かって左側の神は、左足で亀を踏みつけている。玄天上帝だろう。別

のところにはガラスのケースに入った四体の神がいる。いずれも黄金で、背に羽根をつけたものもいる。向かって右の三体は右手をあげて武器をもっている。

中庭に面した軒下には、木鐸（写真 14）が釣り下がり、「委羽山 大有宮」と書かれている。別のところには、宇治の黄檗山万福寺にあるような長細い木魚（写真 15）がぶら下げられている。中庭には、鉄製の大きな香炉がある。香炉の上部は塔になっている。



写真 14 木鐸 委羽山 大有宮



写真 15 木魚 委羽山 大有宮

道観の屋根の中央には、凸面鏡が安置されている。まわりには雲が描かれ、下には神像が三つみえる。禿頭で杖をもち、桃をもつのは南極老人であろうか。鴟尾にあたる部分には、龍と、龍に乗る二人の仙人の姿が描かれる。別の屋根の中央にも凸面鏡が安置される。上部はヒョウタンになっている。下部は鯉が水を吐いている。中庭の反対側の壁には、左から無量壽と書され、仏教の影響を感じさせる。

丹井と瑞井

道観には井戸が二つあり、丹井、瑞井と名づけられている。瑞井の方は石組みで、やや濁っている。中からパイプが出てきているので、この水を利用して簡易水道にしているのであろう。丹井の方は、外面は青いタイル、上部は白いタイルで覆われているが、中をのぞくと石組みである。この水は透明である。やはりパイプがのびているため、簡易水道として利用しているのであろう。『委羽山志』には、丹井、瑞井ともにみえる。丹井には、「在洞前、相傳、羣仙皆取此水煉丹、故名…」といった記述がある。瑞井も「在洞前二百餘歩…」と記されている。『道蔵』には、どちらの井戸の記述もみえない。



写真 16 丹井

洞

洞は高さ2メートル余り、奥行きは15メートル程度にみえる。柵があり、そこから先へは進めないようになっている（写真22）。柵の中には石碑があり、「委羽山洞」と篆書で横書きされ、「此洞通東海、有縁到龍宮（此の洞、東海に通ず、縁有らば龍宮に到る）」と記されている（写真21, 22）。実際に海に通じているかどうかは不明であるが、台州の黄岩区は、海からの直線距離で25キロメートルほどである。なお川まではもっと近い。



写真17 委羽山洞の入り口



写真18 薛蘿源處



写真19 神仙



写真20 獅子に乗る神仙

『委羽山志』には、

委羽山天下第二洞…舊傳、有道士負燭一篋、然入洞中、行數日、燭盡、然指巖之、脊櫓^も聲而返。疑與東海相通云（委羽山は天下の第二洞…舊傳に、有る道士燭一篋を負い、然^もやして洞中に入り、行くこと數日、燭盡き、指を然^もやして之れに巖^つぎ、櫓^きの聲を脊^ききて返る。疑うらくは東海と相い通ずと云う）



写真21 委羽山洞の石碑



写真22 鉄柵があり、奥に入れない

司馬承禎の十大洞天では、青童君が委羽山洞を治めている。青童君は東海青童君とも呼ばれ、東海と関係の深い神仙である。けれども現在の洞の説明では、青童君のことは触れられておらず、龍宮のことが記されている。



写真23 洞内から入り口を見たところ

一方、杜光庭の十大洞天では、洞を治めるのは、司馬季主だとされている。季主は『真誥』に委羽山の石室にいたとされ、そこで尸解したようにみえる。王懸河の『三洞珠囊』巻之八、相好品では、「道を得ること大有宮中に在り、顔色二十の女子の如し、鬚の長さ三尺、黒きこと墨

の如きなり」と、若い女性のような容貌で、鬚が長く、墨のように黒いと記されている。洞内に置かれている神仙の像（写真 19, 20）には名前が書かれていないが、髯の長さから考えて季主ではないだろうか。ただし、『委羽山志』には劉奉林の像の記述はあるが、季主のものはなく、劉奉林であるかもしれない。

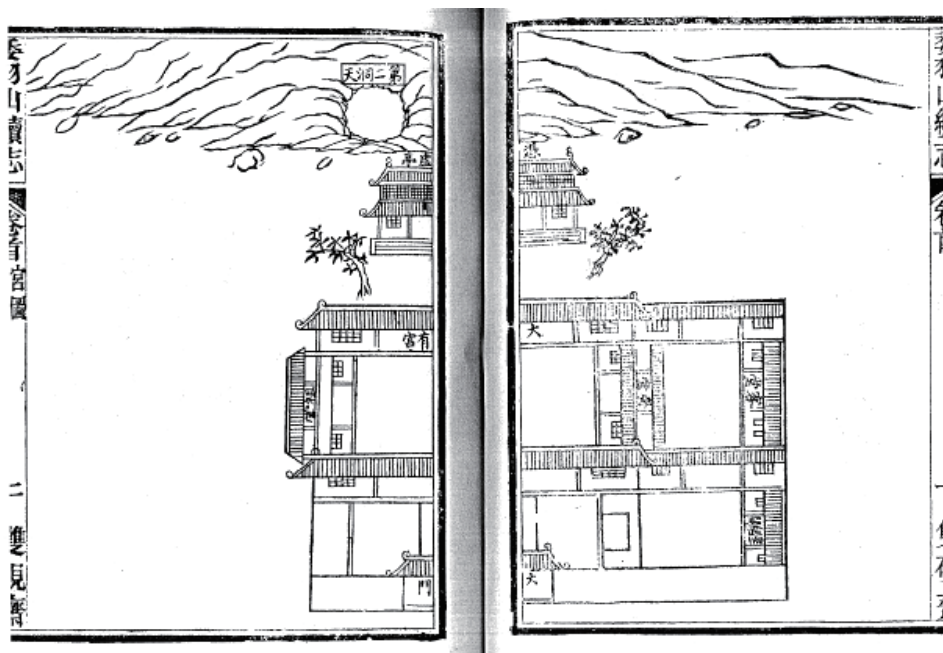


写真 24 第二洞天と書かれた入口と大有宮

委羽山が第二洞天（写真 24）とされたのは、もちろん、この洞窟があったからであろう。現在、洞窟の奥深くにはは立ち入りできなくなっているが、奥行きは、かなり深いと思われる。さきにもたように山自体はとても低いため、重要なのは洞であったことがわかる。そして洞ともっとも深く関わる神仙が季主であったようだ。

道観の境内での聴き取りの一部

文化大革命（的時）被迫害、這裡也被破壞了。

（文化大革命の時に迫害されて、ここも破壊された）

以前有四派、現在有三派、還有一派不知道、一派是治眼病的、一派專門做道場、還有一箇是專門打卦的。這些是解放前。文化大革命被抄家破壞了。

（以前は四派で、現在は三派、あと一派はどうなったか知らない。一派は眼病をなおし、一派は道場を開き、あと一派は八卦占いをした。これは解放前の話。文革の時には、家捜しされて〔宝物を持ち出され〕、壊された。〔かなり被害にあったとのこと。紅衛兵にやられたらしい。あと道観にいた人たちも宝物を持ち出したとのこと、貴重なものがかなり失われたとのことである〕）

本殿の額には民国6年の葉宗浜師の題額があり、この方は天台桐柏宮の道士であるとのこと（本誌 p37 土屋論文注 15 を参照）。[民国時期には天台山との連絡が濃かったと想像されるが、現在はそうでもない。温州、金華あたりとの関係が深いようである。]今はここで修道して出家しに来る者はいない。

民国期には道観の周囲はもっと広く 100 畝もあったが、50 年代の土地改革で縮小された。以前は委羽山の上半分は大有宮だったが、解放後に大有宮とは関係ない人々の墓場にされてしまった。宋の徽宗が下賜した鐘などの文化財があったが、台州市博物館に所蔵されている [今回は調査できなかった]。1986 年には対外開放されたが、ずっと独立経営で政府の援助は出ていない。

道観の事務室で老道士たちと



写真 25 我々の名刺を見る老道士

這辺的道観是全真道、這辺都是全真道、像老師父這樣的年紀比較大、有一些年紀小的。（このあたりの道観は全真教です。このあたりはみな全真教、老師父みたいなお年よりもいらっしゃる、若い人もいます）[※この道観の世話をしてくれている林建国氏（1956 年生）の話。彼はこの道観で生まれて育ったとのこと。この道長（正一派）はこの日不在でいなかった。老道長は全真教だということで、本当は全真教の後継者がほしいような口ぶりであった。現在の正一派の道長のことは、全く話題にのぼらなかった]

老父有三本經書、都在肚子里面、念經讀書要讀無字的經、也就是「無字天書」。

（老師父は三冊の經典をもっておられます。それらの經典はみな腹の中にございます。そして經を読むときは字の無い經を読まれます。それが『無字天書』でございます。）

老道長・戴誠賢師は 90 歳で、黄岩の人、髭が長く、その風貌は道士というにふさわしい。その腹の中にあるという『無字天書』とは、いかにも道教らしい言い方である。

山の上の騎鶴宮で、そこを管理しているおばあさんに聞く

這座廟是什麼廟？（この廟は何という廟？）

騎鶴宮（Jí mó zhōng）〔※方言の発音があまりに異なるため当初、聴き取れず〕（騎鶴宮じゃ）

鶴能上天 劉奉林騎鶴上天、鳳的羽毛掉下来了。（鶴はよく天まで上れるじゃろ。劉奉林は鶴にまたがって天まで上ったんじゃ、それで鳳の羽毛がおちてきたんじゃ）〔※鶴なのに鳳凰の羽？と言いたくなりますが、実際にそういう伝承がある〕



写真 26 騎鶴宮の扁額



写真 27 騎鶴宮の管理のおばあさん



写真 28 劉奉林だろ



写真 29 騎鶴宮内部

劉奉林の話は、「委羽山大有宮簡介（騎鶴亭）」（写真 30）の冒頭の部分にみえる。

世傳周代劉奉林于此控鶴飛升、鶴墜翮、故名委羽。（世に傳う周代劉奉林、此に于て鶴を控して飛升し、鶴翮を墜とす、故に委羽と名づく）

『真誥』『天地宮府図』等の古い文献には劉奉林のことはみえるが、鶴の話は一切ない。また地仙として扱われているが、邪魔に害されて薬ができなかったというような、どちらかといえば低い評価である。

ここでは陳葆光撰『三洞群仙錄』卷之五にみえるものを紹介してみよう。



写真 30 委羽山大有宮簡介



写真 31 騎鶴宮

又東卿君曰、劉奉林學道於嵩山、積四百年、三合神丹、而為邪物所敗、乃徙入委羽山、閉氣不息、於今千餘年矣、猶未昇仙。云此人但得不死、未能有所役使。（又た東卿君曰わく、劉奉林道を嵩山に學び、積むこと四百年、三たび神丹を合わせ、邪物の敗る所と為る、乃ち徙りて委羽山に入り、氣を閉ざして息せず、今に於いて千餘年、猶お未だ昇仙せずと。云う、此の人但だ不死を得るのみ、未だ役使用する所有る能わずと。）

とあるが、鶴の話はない。

明の趙道一撰『歷世真仙体道通鑑』卷之四にもみえる。

劉奉林、周時人、學道於嵩高山四百年、三合神丹、爲邪魔所敗、乃入委羽山、能閉氣、三日不息、至千餘年、猶未昇仙。但服黃連得不死爾。

先の話と大同小異のため、訓読は省略するが、ここにも鶴の話はない。『歷世真仙体道通鑑』は、宋末までの仙人の伝記の集大成ともいべき書物であるが、そこに鶴の話がないということは興味深い。

いまでは中央が斗母天尊、左に何仙姑、右に呂洞賓をまつている。それらの右に三官大帝もまつられている。

鶴に乗る話

さて、それでは、鶴に乗る話がどこからでてくるのかを考察してみたい。『委羽山志』¹⁰巻二には、

劉奉林、學道於嵩高山、能閉氣、三日不息、四百餘年、三合神丹、爲邪物所敗、但服黃連得不死。慕俱依山、乃仙聖窟宅、自有神物護持、即徙居焉、丹成服之、遂控雀上昇、墜大翻于山椒、後人因名爲委羽、號劉爲大有真人云。（見素仙子傳、真誥、仙史、雲笈七籤、三臺怪真志、一統志）

前半部分は、先に見た道教関係の仙伝にもみえた。後半部分の「遂控雀上昇、墜大翻于山椒、後人因名爲委羽、號劉爲大有真人云（遂に雀に控せられて上昇し、大翻を山椒に墜とし、後人因りて名づけて委羽と爲し、劉を號して大有真人と爲すと云う）」は、劉奉林を鶴、鶴の羽、委羽山、大有（大有宮）と結びつけようとしているもので、確かにわかりやすい。しかし、注に典拠として引かれる『真誥』や『雲笈七籤』には、後半部分はみえない。

以下、『委羽山志』に引かれる詩文から、考察してみたい。

巻四「題詠」には、晋の潘端明¹¹の「游委羽山」という詩を紹介する。

借問仙游子、何年上玉京。（仙游子に借問す、何れの年にか玉京に上らん）
至今称委羽、靈秀似蓬瀛。（今に至るまで委羽と称す、靈秀なること蓬瀛に似たり）

その仙人修行をしているお方に、おたずねしてみましょう。「いったい、いつになったら天界の都に、おのぼりになられるのですか。委羽山は、今にいたるまで『羽に委ねて（天に飛んでいく山）』といわれていますよ。その山の秀靈なることは（かの東海の三神山の）蓬萊や瀛洲のようですね」と。

「委羽」の本来の由来は不明だが、その文字の意味から、「羽に^{ゆだ}委ねて」と解され、背中に羽が生えた羽人のようになって、あるいは、鶴や鳳のような鳥の背に乗って昇天するものとみなさ

10 明、胡昌賢纂、清王維翰統輯、清、同治九年（1870）委羽石室重刻本。

11 邑人 胡昌賢伯舉修輯、『委羽山志』巻四・題詠・游委羽山の注に名正以字行…とある。

れたのであろう。仙游子が具体的に誰かをさすのか、あるいはたんに詩の創作上、登場させた人物なのかは不明だが、時代からみて、劉奉林でないことは確かである。

つぎに謝靈運（385-433）の「題委羽山¹²」という詩が紹介される。

山頭方石¹³ 靜、洞口花自開。（山頭、方石靜かなり、洞口花自ら開く）
鶴背人不見、滿地空綠苔。（鶴の背に人見えず、滿地空しく綠苔）

謝靈運は羅浮山賦（『芸文類聚』卷七所収）で「洞天有九此惟七」と記し、すでに「洞天」という言葉を使用している。

唐の顧況（725 ごろ -841 ごろ）に、

昔日乘鶴玉京游、翮遺仙洞何幽幽。（昔日鶴に乗り玉京に遊ぶ、翮^お遺ち仙洞何ぞ幽幽）
我来尋覓空夷猶、烟霞萬壑明清秋。（我れ来たりて尋ね覓め空しく夷猶し、烟霞萬壑、明らかたり清秋）
何當騎麟翳鳳登瀛州、倏忽已消萬古愁。（何れか當に麟に騎り鳳に翳し瀛州に登り、倏忽として已に萬古の愁を消すべし）¹⁴

「昔日鶴に乗り玉京に遊ぶ、翮^お遺ち仙洞何ぞ幽幽」という部分は、鶴に乗る話と鶴が羽を落とした話になっていて、「委羽山簡介」の話に対応している。また、そのあとの「我れ来たりて尋ね覓め空しく夷猶し」の夷猶は、ぐずぐずする意味だが、なかなか昇仙しなかった劉奉林のことを想起させる。この詩は、どうも劉奉林のことを意識しているようにみえる。

『兩宋名賢小集¹⁵』は南宋の杜範（1181-1245）の空明洞を収録する。この詩が『委羽山志』にも、ほぼ同文で紹介されている。以下は『兩宋名賢小集』のものである。

莫訝青山小、山因洞得名。（訝かる莫かれ青山の小なるを、山は洞に因りて名を得）
仙人騎鶴去、留蹟在空明。（仙人鶴に騎りて去り、蹟を留むること空明に在り）

杜範は、「黃巖人¹⁶」とされており、委羽山の近くの人である。「訝かる莫かれ青山の小なるを」を見れば、委羽山がどれほど小さかったかが、実感できる。また「山は洞に因りて名を得」を見れば、山ではなく「洞」が重要だということがわかる。「仙人鶴に騎りて去り」は、まさに簡介の記述にぴったりであるが、この仙人が劉奉林であるかどうかについては記されていない。

元、潘士驥の詩には、「控鶴者誰卯金刀、五雲何處風飄飄¹⁷」とみえ、卯金刀は劉の析字であ

12 ここにしか見えない詩である。

13 『委羽山志』一卷、勝蹟に方石がみえる。方石なので、四角い大きな石のようにみえるが、注に「産山中色類磁石…皆稜角方正…」とみえ、鉾石のようである。

14 詩の名はない。顧況には華陽集という文集があるが、この詩は収録されていない。

15 宋、陳思編、元、陳世隆補『兩宋名賢小集』卷二百五十五、清猷集、四庫全書にみえる。

16 前掲『兩宋名賢小集』

17 『委羽山志』卷四

るから、これが劉奉林を暗示していることがわかる。

明になると、解餘慶が、「仙人劉奉林、何年昇碧落¹⁸」と、ここではじめて劉奉林の名がみえる。そのあとは盧廷剛の「奉林控崔昇碧天¹⁹」、陳公綸の「倚策遙思劉奉林²⁰」と劉奉林の名前が多くみえるようになる。一方、司馬季主は、明、王紀の詩に「問卜憐司馬、燒丹憶奉林²¹」と、司馬季主と劉奉林の名がみえる。けれども、『委羽山志』にみえる詩の多くは鶴のことを記しており、それは結局、劉奉林とむすびつけられている。本来の道教の記録では鶴と劉奉林は、とくに関係がないのだが、いつのまにか中国文学系の詩によって、それが史実のように認識され、道観側の説明にまで影響を与えているのである。

青童君の没落

青童君に関しては、前掲「洞天における山と洞穴—委羽山を例として—」において、「三、青童君」として考察した。そこでは、青童君は東海王青華小童君であり、『洞玄靈宝真靈位業図』に第二中位の左位にランクされる地位の高い神仙ではないかと論じた。ところが、『委羽山志』巻二では、そのことには全くふれず、以下の話を記す。

青童君不知何許人、嘗至委羽山修道、道神光（光）四徹、遂遍游天下名山、不知所終（見石室登名記）

これを見ると青童君は、どこの誰ともしれない人で、委羽山で修行したあと、「終わる所を知らず」と記されるのみで評価が低くなっている。

おわりに

委羽山の最初の印象は、杜範の詩にあるように、「莫訝青山小」というものであった。そのあと洞を見て、「山因洞得名」というのが実感できた。司馬季主は、洞の中で尸解したとされ、洞と昇仙は本来、関係がある。地理的な関係から洞と海が結び付けられた。本来、東海青童君などと深く関連していたはずだが、よりなじみの深い龍宮と結びつけられるようになる。青童君は、司馬承禎の『天地宮府図』で、委羽山洞を治めているとされていたが、『委羽山志』では、「青童君不知何許人」と、誰かわからないといった記述がされ、そのためか、青童君のことを詠んだ詩もほとんどない。また、劉奉林は、古い道教関係の記述では、あまり評価が高くないが、『委羽山志』では鶴に乗って飛ぶ話とむすびつけられ、委羽山を代表する仙人とされている。現在の廟にかかげられる説明も、ほぼこの『委羽山志』の記述にもとづいたものとなっている。

18 同巻五

19 同

20 同巻六

21 同